



Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol. **38**
2015

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

- CONTENTS ■ チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
■ カザフスタンへ専門家派遣事業を実施しました
■ 韓国への専門家派遣事業を実施しました



セメイでのナシム研修経験者との昼食会にて

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修を実施



長崎県濱本副知事を表敬

平成27年の今年は広島・長崎に原爆が落とされてから70年を迎えました。

平成23年3月に福島第一原発事故が発生して以来、放射線や被曝に関する人々の関心はますます高まっています。

ナシムは、チェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報提供を行うため、6名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は7月15日から約1ヶ月間、長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについて理解を深めました。

【日程概要】

- 7/15 長崎到着
- 7/16～8/3 関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
- 8/4～8/17 長崎大学（病院）等での専門研修
- 8/18 帰国のため長崎出発

【研修生名簿】 左側山下教授隣から

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1. プシュカロフ ビクトル (ウクライナ) | ウクライナ内分泌代謝研究所 研究者 |
| 2. プロニシュキナ クリスティーナ (ロシア) | オブニンスク放射線医学研究センター 研究者 |
| 3. シブダ ウラジミール (ベラルーシ) | ブレスト州立内分泌センター 副センター長 |
| 4. ルシチク マキシム (ベラルーシ) | ベラルーシ卒後医科大学 センター長 |
| 5. マナンバエワ ズフラ (カザフスタン) | セメイ医科大学 主任教授 |
| 6. トカエワ アルマ (カザフスタン) | セメイ医科大学 准教授 |



長崎市田上市長を訪問

研修後の感想



Proniushkina Kristina (プロニシュキナ・クリスティーナ)

ロシア連邦 オブニンスク放射線医学研究センター
放射線照射後修復、放射線生物学 研究員

長崎のNASHIM研修は2015年7月16日から同年8月17日の期間で行われた。これは豊富な研究情報を受け取り、交わしたという点においても、精神と文化の面においても忘れられない一か月となった。長崎の権威ある専門家のもとで学ぶ機会を得られたことに対し、NASHIMと山下教授に心より御礼を申し上げたい。

研修の一環として、私たち研修生は長崎市および県の主な保健機関を訪問することができた。驚かされたのは、これら施設および団体を訪れる患者、特に1945年の原爆の被害者に対するケアが大変手厚く包括的なものであることだった。また私たちは長崎滞在中に、長崎県副知事と長崎市長、また長崎大学幹部

への表敬訪問をする機会も得た。

私たちの研修の理論面の中心となったのが、放射線医療と放射線安全の様々なテーマに関する講義であった。新しくホットな情報として興味深かったのが、山下教授と高村教授による、2011年の福島第一原発事故に関わる地域の放射線生物学的状態についての講義であった。同様に、鈴木教授の放射線誘発性細胞損傷の分子構造、そして李先生の幹細胞に関する講義は私の研究に有益であった。

専門研修は放射線分子疫学部（原研疫学）で行った。あらためてウラジーミル・サエンコ先生、タチヤナ・ログノヴィッチ先生、アレクサンドル・ニキツキー氏に対し、特別なご配慮をいただいたこと、また初代培養と分子遺伝学の新手法を習得できたことに御礼を申し上げたい。言うまでもなく、これらスキルは私にとって大変貴重であり今後の研究に役立てていくつもりである。

それと同時にぜひ述べたいのが、私たちの見た日本と長崎は視察先だけに留まらないということである。私たちは非常に充実した文化体験をすることができた。担当者の西さんと通訳の水野さんが積極的に関わってくれ、長崎の記念すべき場所を数多く訪れることができた。日本人の行動文化には驚かされた。日本人は最も時間に正確で、規律正しく、礼儀正しい民族の一つだと思う。そして言うまでもなく、忘れられないのが8月9日の式典への参加である。日本人がいかに原爆被害者の魂を弔い、この悲劇を若い世代に伝えようとしているか！

私たちの素晴らしいグループについても言及しないではいけない。とても賢く、心のある人々であった。私はこの中で最年少であったが、私たちは研修期間中、お互いを支え合い、様々な専門分野における経験を分かち合った。

この研修は、私にとってとても貴重な経験である。私が持ち帰る知識と思い出は、私の記憶に一生残るだろう。あらためて、本研修に参加する機会を得られたことに感謝の意を表したい。



恵の丘長崎原爆ホームにて



Pushkarov Viktor (プシュカロフ ビクトル)

ウクライナ内分泌代謝研究所
分子生物学 研究者

このNASHIM研修に参加した長崎滞在期間中、多くの素晴らしい人々と出会い、素晴らしい場所を訪れることができた。また私の専門である分子生物学および遺伝子学におけるスキルを飛躍的に高めることができた。

長崎は、一目で恋してしまうほど素晴らしい街である。一か月を少し超える滞在の中で、この街が提供する観光名所を全て訪れてみようと思い、それはほぼ成功した。それどころか、地図に載っていない面白い場所を探し求め、ハイウェイを探検する羽目になったほどである。唯一、私の「To Do リスト」に載せていて実践できなかったこと、それは稲佐山国際墓地を訪れなかったことである。

長崎に着いて最初の週末、私たち研修生グループを事務局の西さんが伊王島の海水浴場に案内してくれ、私たちは素晴らしい時間を過ごすことができた。また他の週末には、同じく西さんが私たちを雲仙岳の温泉に連れていってくれた。あまりに長く熱い湯につかりすぎ、その後気分が最高によいとは言い難い状態になってしまったにもかかわらず、これは私にとって興味深く、大変貴重な体験となった。

研修プログラムの前半は、講義形式であり、非常に情報に富み興味深いものばかりであった。また研修期間の最初の2週間は、NASHIM研修を支える長崎県や市の行政関係者、またその他関係者を表敬訪問した。長崎県副知事、長崎市長、NASHIM会長、長崎大学医学部長、長崎大学病院長、長崎大学長など、その他多くの人々と会うことができた。私たちはまた、日本赤十字社長崎原爆病院、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎医療センターなどの施設を訪問した。私たちはNASHIMの全てを理解し、また私たち自身がいかに貢献できるかを知ることができた。

8月8日、私たちは植樹祭に参加し、その後山下教授の別荘に招待された。大変美しい場所であった。またその途中、有田陶磁美術館にも立ち寄ることができた。

8月9日には、今年長崎への原爆投下70周年にあたるが、平和祈念式典に出席する機会に恵まれた。

研修後半の2週間は、我々はそれぞれの専門に分かれて研修を受けた。私はロシアの放射線生物学専門家であるクリスティーナ・プロニューシキナ氏とともにウラジーミル・サエンコ先生とタチアナ・ラグノヴィッチ先生の指導のもとで実習を行った。私はリアルタイムPCR (RT PCR) 手法、またDNAシーケンシングを習得し、プライマリーカルチャーを学んだ。

このように新しく獲得したスキルを可能な限り活用するつもりである。また私の知識が長崎大学医学部の皆様や他のNASHIM研修参加者に少しでも役立てば幸いである。



長崎医療センター (大村)



Lushchik Maxim (ルシチク マキシム)

ベラルーシ卒業医科大学
内分泌学、甲状腺学 センター長

2015年夏のNASHIM研修は大成功に終わった。

実用的な観点で言えば、多くの興味深いポイントは放射線防護および放射線医学の分野で学ぶこととなった。原爆の放射線影響に関する講義は非常に的確に定義付けされており、各スライドは驚くほどの出来であった。

特に、福島原子力発電所における惨事の影響を克服する上での教訓として、新しい統計方法と疫学研究に対する新しいアプローチを取り上げた講義を聴いたことは、私個人にとって大変有益であった。

分子生物学と細胞工学の分野としては、これまた同じく、長崎大学の錚々たる教授陣により、最新の研究成果の概要と新しい研究の方向が高い専門レベルにより紹介され、大変有益であった。

臨床部分については、大変入念に計画され、かつ実施された。様々なレベルの異なる医療機関（長崎日赤病院、大村の長崎医療センター、長崎大学病院）において入院および外来患者の様子を見ることができた。実際に仕事の運営組織の様子を見ることは非常に重要であった。特に、多くの実践アプローチは、ベラルーシの臨床現場に容易に導入できると思う。

長崎大学病院第一内科の私たちの担当教官である森良孝先生と安藤隆雄先生は、私たちのために大変内容深く、具体的で視覚情報に富んだ研修をアレンジしてくださった。私たちは数多くの外来患者のケースを目にすることができ（それらの多くは一般的な研修医の観点では稀な診断ケースである）、臨床カンファレンスにも参加し、病棟でのフォローアップ戦略や診断技術について当大学病院の経験を学ぶことができた。

自由時間には、私たちは長崎の歴史的な名所に深く触れ、古い街であり、それと同時に非常に発展した長崎の自然と美しさを見ることができ、長崎の思い出をたくさん作ることができた。私たちの学習外活動は、現地受入担当者である西さんの献身的なサポートと案内によって充実していた。西さんのおかげで、自力では簡単に見つけれられないような特別な場所を見ることができた。また雲仙岳や伊王島、その他歴史的な名所に案内してくださった。

国際協力という意味での提言として、研修コースの数日を研修生の関心トピックスあるいは地域をテーマに研修生によるディスカッションを設けてはどうだろうか。セミナーの一環としてもいいし、オプションとして行ってもいいと思う。

言語ファシリテーションについては、講義の多くに英語が用いられ、教材のスライドは英語で提示された。日本語の医療あるいは他の専門用語を英語に置き換えることは容易ではないと思うが、私たちはメッセージを理解することができた。

全体として、本研修はポジティブな印象と、新しい専門的情報とインスピレーションに満ちていた。

本研修の修了にあたり、NASHIM、長崎大学後障害医療研究所、長崎大学に対し、このような教育・研修活動を続け、国際協力を支えていることに感謝申し上げたい。

特に、NASHIMの蒔本恭会長、山下俊一教授、そしてこの素晴らしい夏の研修に携わった全ての関係者、指導教官の皆様に御礼を申し上げる。

アリガトウゴザイマス！



8月9日平和祈念式典参列後平和祈念像前にて



Tokayeva Alma (トカエワ アルマ)

カザフスタン共和国 セメイ医科大学
感染症学 准教授

まず、NASHIM事業である研修を受ける機会を得られたことに対し、御礼の言葉を申し上げたい。

私にとってかけがえのない経験となった。

研修プログラムは様々な局面を包括していた。

私たちは、長崎県副知事や長崎市長、長崎県医師会会長、長崎大学学長、長崎大学病院院長に表敬訪問する機会に恵まれた。どこにいても私たちは親切に、また尊敬をもって迎えられた。これらの訪問を通して分かったのは、私たち全員、それは日本、ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、そしてカザフスタンの代表者であるが、私たちを一つにしているのは、核のない世界を守るという共通の課題だということである。

私にとって非常に興味深かったのが、様々な医療機関への訪問である。それは長崎日赤病院、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原子爆弾被爆者対策協議会（原対協）、放射線影響研究所（RERF）、独立行政法人国

立病院機構長崎医療センターといった、原子爆弾の被爆者への支援およびケアを行っている機関である。というのは、私が住むセミパラチンスク地区も長い期間にわたり放射線被ばくを受けており、現在では汚染地域の住民に対するリハビリが私たち医療関係者により行われているからである。

本研修の中で、長崎大学原爆後障害医療研究所の著名な教授陣、専門家による興味深い講義を聴くことができた。それは、山下俊一教授、高村昇教授、中島正洋教授、宮崎泰司教授、柴田義貞教授、工藤崇教授、大津留晶教授、李桃生教授、鈴木啓司准教授、横田賢一助教、アレクサンドル・ルバノヴィッチ教授、ウラジーミル・サエンコ准教授、タチアナ・ログノヴィッチ准教授といった面々である。これら講義ではまさにアクチュアルなテーマが取り上げられ、放射線安全、疫学、放射線医学、移植、血液学などに関して私の知識を豊かにした。

このような高いレベルでの理論研修の組立と実施に対し、その準備段階の労も含め、山下教授をはじめとする講師陣にあらためて御礼を申し上げたい。

臨床部分としては、長崎大学病院感染症内科（熱帯医学研究所臨床感染症学分野）において有吉紅也教授の指導のもとで専門研修を受けることができた。私は日本の同僚から感染症内科の仕事の構成、感染症の診断および治療の原則、また熱帯医学マスターコースの教育内容を知ることができた。また有吉教授の回診、院内感染対策カンファレンスに参加し、外来および入院患者の診察、気管支鏡検査や肝臓のエラストグラフィ診断にも立ち会うことができた。それに加え、私自身の経験を日本の同僚と分かち合う機会にも恵まれた。今回、日本側の依頼により、カザフスタン東部にみられる人獣共通感染症に関する講義をさせていただいたのである。感染症内科の皆様からは常にご配慮と優しさを感じ、親切に対応していただいた。専門研修期間を通じて学びやすい環境をつくってくださったことに心から感謝している。特に、有吉紅也教授、現場における素晴らしい研修をアレンジしてくださった田中健之先生、講義アレンジ担当の鈴木基先生に厚く御礼を申し上げたい。今後とも実りある協力が続くことを期待している。今回得た経験は、自身の臨床分野において活用していきたい。

私の記憶に永遠に残るであろうもの、それは長崎原爆資料館の見学、長崎医療センターでの「広島被ばくエノキ3世」の植樹祭への参加、また今年は長崎原爆投下から70年の節目にあたるが、その平和式典への参加であろう。原爆被爆者を大事に思う日本国民の姿勢は全世界が見習うべき姿である。

最後に、私たちの長崎滞在期間を通して快適な環境を作ってくくださったNASHIMの西さんに、その高い運営能力、責任感と親切心に敬意を表し、心より御礼の言葉を述べたい。また通訳の水野さんの高いプロフェッショナルな技能に対し、かつ私の感染症内科での専門研修をサポートいただいたことに御礼申し上げる。

本研修で得られた経験はかけがえのないものである。私自身の研究レベル、知識レベル、臨床知見を高めただけでなく、専門を通じた交流の輪を広げることができた。

ありがとうございました！皆様に今後の更なるご活躍とご繁栄をお祈りしつつ。

カザフスタンへ専門家派遣事業を実施しました。



長崎大学 原爆後障害医療研究所 放射線・環境健康影響共同研究推進センター
教授 **林田 直美**

平成27年8月25日から31日までの日程でカザフスタンを訪問しました。

今回はナシムの派遣事業にてナシム会長・蒔本先生、長崎県医師会副会長・高原先生、事務局・西さん、そして私の4名と、長崎大学より副学長・理事の山下教授、国際連携戦略本部の高橋さんの計6名が先発隊として現地入りし、数日遅れて長崎大学原爆後障害医療研究所の中島教授が合流することになっています。

先発隊は8月25日の早朝7時発の九州急行バスにて長崎から福岡空港まで向かい、福岡から出国して仁川^{いんちよん}を経由し、アルマティへ…となっていました。ところが、24日の時点で、25日朝には台風15号が九州へ上陸するとの情報が入り、21時発の九州急行バス最終便にて福岡に行き、前泊することが当日の夕方に決定しました。25日朝の新幹線にて関西空港へ向かい、関西-仁川の便に搭乗する予定としました。先発隊の6名は大慌てで身支度を整え、福岡に向かいました。福岡へ近づくとつれ、強風が吹き始め、雨も降りだし、ホテルへチェックインしたのは夜中近くになっていました。

8月25日

早朝5時、ロビーに集合。ホテル前でタクシーを拾うことにしましたが、早朝の5時過ぎ。風雨も強まる中、そうそうタクシーも走っていません。何とか2台確保し、博多駅まで向かいました。

5時半を回った頃に博多駅に到着しましたが、台風の影響で、新幹線は博多-広島間で全線運転見合わせ。ローカル線も運休。何とかして関西空港まで辿り着かなければ、アルマティでの予定がすべてキャンセルとなってしまいます。そこで、タクシーで広島駅まで移動することにしました。しかし、朝6時前のタクシーは夜勤明けがほとんどで、広島までの超長距離はすべて断られました。しばらく困っていると、タクシー乗場に個人タクシーが入ってきました。藁にも縋る思いで運転手さんに尋ねると、広島まで行っても良い、とのお返事でした。しかし、6人で海外用の大きな荷物を抱えているため、もう1台必要です。近くにいた別のタクシーと交渉し、何とか2台確保しました。3人ずつ2台に分かれ、いよいよ広島に向けて出発です。

高速道路は台風のため、速度制限がありましたが、まだ通行止めにはなっておらず、運転手さんのプロの腕にすべての運を託し、広島駅を目指しました。高速では強風にあおられた車体が右に左によろけます。九州と本州をつなぐ関門橋はすでに通行止めであったため、関門トンネルを抜け、山口県で再び高速に乗りました。しかし、どこまで行っても大雨と強風がついてきます。いつの間にか、2台のタクシーは別々になり、電話で連絡を取りながらの走行となりました。高原先生、高橋さん、私が乗ったタクシーは、関門トンネル入り口で道を間違えた蒔本会長、山下教授、西さんが乗ったタクシーを追い越していました。

さすがに博多から広島までの移動となると、タクシーも途中で給油しなければならず、宮島SAで給油することになりました。ちょうどその時、後続タクシーの山下教授より連絡があったため、宮島で給油していることをお伝えすると、先に行っている、ということでした。給油を終え、五日市インターで高速を降り、広島高速4号線を目指していると、再び山下教授より連絡があり、廿日市インターで高速を降り、2号線で広島駅に向かっているが、渋滞で進まない、とのことでした。宮島まで行っていることはすでにお伝えしていたため、もう一台も五日市までは行くものと思い込んでいたことが誤算でした。とにかく先に行け、後は何とかする、という山下教授からの指示を受け、我々が乗ったタクシーは渋滞に巻き込まれることもなく広島駅に向かい、何とか9時35分広島発の新幹線に飛び乗ることができました。新大阪駅には11時01分に到着。旅行代理店が関西空港に連絡してくれ、12時20分までにチェックインすれば、12時50発の仁川行きの飛行機に乗せてもらえることになりました。新大阪駅でまたタクシーに乗り換え、1時間ほどかけて関西空港に到着しました。チェックインできたのは、12時15分頃。ぎりぎり間に合いました。後続タクシーの3人は、9時53分広島発の新幹線に乗ったようですが、到底間に合うはずもなく、高原先生、高橋さん、私の3人は、蒔本会長、山下教授、西さんの3人を日本に残し、仁川に飛びました。仁川空港到着後、山下教授より、13時50分に関西空港を出発するイースター航空の臨時便が見つかり、なんとか3席確保できたので、それで仁川に向かうとの連絡が入りました。ただし、スーツケースを一度仁川でピックアップする必要があるとのこと。大変な目にあいましたが、15時半過ぎに何とか無事に仁川に到着した3人と合流することができました。18時10分発のアルマティ行きも1時間遅れの出発となりましたが、6人そろって乗り込み、現地時間の23時過ぎ、無事にアルマティ空港に到着したのです。私はカザフスタンを訪れるのは7回目ですが、このように大変な思いをしてたどり着いたのは初めてでした。



カザフスタン国立医科大学にて



内分泌研究所訪問

8月26日

11時にカザフスタン国立医科大学病院視察、その後、学長表敬訪問、の予定でしたが、予定が変更となり、まずアカノフ学長を表敬訪問しました。アカノフ学長と山下教授との協力関係は20年前から続いています。学長、副学長をはじめ、カザフスタン国立医科大学の教授陣が同席され、これまでの長崎とカザフスタン国立医科大学との協力関係について再認識するとともに、今後も更に両者間で協力し、人材交流を続けていくことが再確認されました。

続いて、大学病院を視察しました。この病院は大学病院というにはまだ規模が小さく、実際は主に糖尿病治療を専門とした糖尿病センターであり、まだまだ問題はあつたものの、今後循環器病センターの開設も

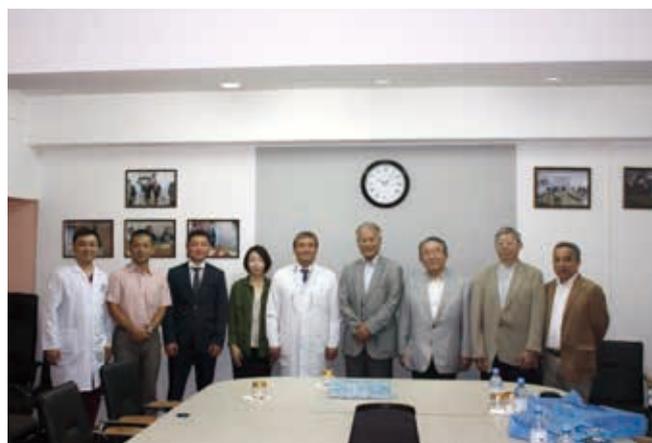
準備中であるとのことでした。また、糖尿病合併症の治療のための手術室も現在建設中であり、今後さらに発展していく病院ではないかと思われました。

午後は、内分泌研究所を訪問しました。この研究所は内分泌疾患、特に甲状腺疾患の診断、治療を専門とした私立病院であり、受診者の診療費は全額自己負担とのことでした。まさに、診断から治療までこの病院で完結します。案内してくれた職員によれば、院長先生はかなりの大御所であり、病院の評判を聞きつけ、遠方からも患者さんが訪れるとのことでした。ちょうどこの日も院内カンファランスの最中で、急遽山下教授からチェルノブイリと福島の実状と小児甲状腺についての短いレクチャーが行われましたが、多くの質問が飛び交い、病院職員が甲状腺、内分泌疾患について熱心に勉強する姿勢がうかがわれました。

8月27日

午前中はアルマティ第7市立病院を視察しました。院長先生の御息のジャスランさんは、現在長崎大学病院の移植・消化器外科に留学中であり、私と机を並べて勉強しています。ちょうどジャスランさんも夏休みで帰省中であり、病院の視察に同席してくれました。この病院は外科救急センターであり、ベッド数は1,000床。長崎大学病院が862床ですので、どれほど大きな病院かお分かりいただけるかと思います。救急外傷のためのベッドも45床あります。年間1万件以上の予定手術を行っており、さらに肝移植手術も行われているとのことでした。院内には外来化学療法のためのベッドを配置した化学療法室、肝移植後の専用ICUなども完備され、最新の真新しいモニターなどの機器類が整然と並べられていました。さらに、今後は膵移植も検討している、とのことでした。院内は非常に清潔に保たれており、術後合併症に対する対策もきちんと講じられ、医療レベルの高さがうかがわれました。

夕方のセメイ市へのフライトまで時間があつたため、お昼からはチェンブラクという山の中腹までロープウェイで向かいました。このロープウェイは1年前に完成したとのこと、25分間でチェンブラクまで行きます。途中、高所にあるために世界記録が出やすいというスケートリンクなども眼下に見えましたが、全く登山することなく2,240mまで移動するため、山に来ているような感覚はありませんでした。チェンブラクに到着すると、さすがにひんやりしており、周りを囲む山々は雪をかぶっていて、行ったことはありませんが、まるでスイスに来たような感じでした。ここで中島教授と合流して昼食を取り、その後アルマティ空港に移動し、セメイ市までのフライトとなりました。セメイ空港に到着し、飛行機のタラップを降りると、空港内を通ることなく、一般の乗客とは別の出口に案内されました。スーツケースもベルトコンベアに乗せられる前に我々の前にカートごと移動して来ました。特別待遇です。



アルマティ第7市立病院



東カザフスタン支部と県医師会の調印式

8月28日

セメイ市での第1日目です。この日の午前中は、セメイ地方がんセンターを訪問しました。私はこのがんセンターには2006年から訪れていますが、最後に訪問した2年前から比較すると格段に進歩しており、大変驚かされました。新しい建物がすっかり完成し、一部に核医学センターが設置されていました。核医学センターには、PET/CT 2台、地下にサイクロトロン、さらにその地下には排水施設があり、その他にもSPECT、リニアック、MRIなど、最新の診断設備が整っていました。カザフスタンではこのセンターのような診断治療センターが5施設整備され、政府がすべての費用を負担しているとのことでした。素晴らしい機材はそろっていますが、今後はそれをどう活用していくかが大きな問題ではないかと思います。カザフスタンでは画像診断や病理診断において、大まかな診断ができるかどうか第一であり、画像や標本の質をより良いものにしようとする気質はあまりないように思いますので、特に、この様な機器を扱う技師、診断する医師に対する、人材育成、教育という面では日本の役割もまだまだあるのではないかと感じました。

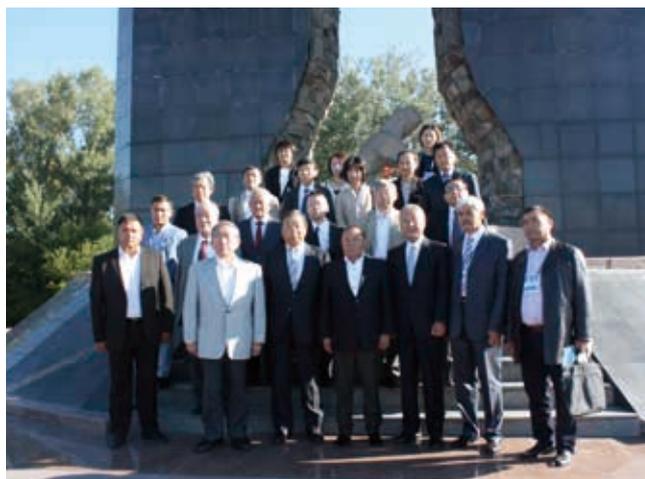
この日の午後は、カザフスタン共和国医療会議所東カザフスタン支部と長崎県医師会との覚書調印式がセメイ市役所で行われました。カザフスタン共和国医療会議所東カザフスタン支部はカザフスタンでの医師会地方会にあたる組織です。保健局関係者や、支部の会員である病院、センター、診療所などの院長、センター長らが出席し、セメイ市長自らの司会で調印式が進められました。エンセバーエフ支部長と蒔本会長がそれぞれ協定書にサインを行い、人材交流、情報共有に関する覚書が交わされました。さらに、セメイ市長から記念品が手渡されるとともに、長崎大学からセメイ市長へも長崎の鐘が贈呈されました。

その後、セメイ医科大学に向かい、セメイ医科大学臨床研修センターを視察しました。模型とコンピュータプログラムを駆使し、救急蘇生、小児医療、産科医療、急変時の対応など、様々なシミュレーションシステムがありました。このプログラムはアメリカ製で、様々な細かい条件設定ができるとのことでした。大変に素晴らしい施設でしたが、1学年600名程度の学生がすべて学習するには、やはり実習スケジュール設定に大変な苦勞があるようでした。

いよいよ、セメイ医科大学主催「環境・放射線・健康」会議のオープニングセレモニーです。日本からは、我々長崎の他、広島、島根からも専門家が参加していました。セレモニーの中では、蒔本会長から、ナシムの活動についての紹介と、これまでの役割について、また、今後の抱負についての挨拶がありました。さらに、山下教授からも会議開催にあたっての挨拶があり、それに引き続き長崎国際医学生奨励賞の授賞式が行われました。この賞は長崎大学からセメイ医科大学の優秀な学生に毎年贈られている賞で、今年は女子学生2名が受賞しました。オープニングセレモニー終了後は調印式に出席した保健局担当者、院長、センター長らとともに、懇親会が開かれました。懇親会では、今後の協力関係の強化について、改めて意見が交わされました。



長崎賞受賞者と山下教授



核実験犠牲者慰霊碑にて

8月29日

この日は、核実験場閉鎖記念日です。当初、9時より「環境・放射線・健康」会議に出席する予定でしたが、乗り込んだ迎いの車は医科大学ではなく、セメイ市にある島、ポルコブニチー島に向かいました。この島は、核実験による犠牲者を慰霊するための記念碑がある公園です。記念碑はキノコ雲をかたどった巨大な塔と、キノコ雲の下でわが子の上に覆いかぶさり、子供をかばう母親の像からなっています。ここで、蒔本会長をはじめ、日本からの参加者が核実験犠牲者の碑に献花を行い、記念写真を撮影しました。

その後、会議参加のために、セメイ医科大学に移動し、会議が始まりました。会議では、島根大学、広島大学の専門家と、長崎からは山下教授、中島教授がそれぞれこれまでの研究の成果とご経験を話され、質疑応答が行われました。

午後は会議の分科会が行われ、現在長崎大学で研究を行っている、ジャンナさんの発表がありました。ジャンナさんは、ロシア語はもちろんのこと、英語も、一部日本語も堪能です。ご自身で、ロシア語、続いて英語で話すという、一人発表同時通訳という離れ業をこなしていました。

会議終了後のGala Dinnerでは、招待された各国の参加者が参加し、盛大なパーティーが行われました。カザフスタンの歌やダンス、さらには、カザフ語と日本語による核実験犠牲者のための歌、カザフスタンの民族楽器である、2弦のドンブラの演奏などが披露されました。パーティーでは、音楽に合わせて、参加者全員が踊り、歌い、そしてウォッカを飲み、大変楽しい時間を過ごしました。



核実験犠牲者慰霊碑



セメイ医科大学入学式

8月30日

いよいよ帰国の日です。午前中はセメイ市内を観光する予定でしたが、この日はセメイ医科大学の入学式があり、山下教授に入学式で一言挨拶してほしい、という要請により、山下教授は高橋さんとともに朝から入学式出席となりました。それ以外のメンバーは、ホテル周辺を散策することになりました。セメイ医科大学は宿泊しているホテルのすぐ近くにあり、前を通りかかると、学長の声が聞こえてきました。日本では、入学式は講堂やイベントホールなど、屋内ですることが一般的ですが、セメイ医科大学では大学の玄関前で入学式が開催されていました。階段上の大学正面玄関前に学長をはじめ、山下先生などが立ち、学生は階段下の広場に集まり、その外側に保護者が集まっていました。道を挟んだ向かい側の公園では、保護者や一般市民の方がベンチに座ったり、思い思いにくつろぎながら入学式を眺めていました。

ホテルをチェックアウトした後、セメイ市のナシム研修経験者との懇親昼食会が行われました。我々6名以外に、12名が参加してくれました。ナシムで長崎に研修に来た皆さんは、それぞれの経験を生かし、セメイ市を中心に活躍しておられます。研修の感想をそれぞれに話してもらいましたが、学術的な面はもちろんのこと、文化的な面でも大変な刺激であったとの感想が多く聞かれました。また、皆さんはそれぞれ伝えていくことの重要性を認識しておられ、改めてナシムの役割の大きさを感じました。

セメイ空港からの出発も、到着時と同様に特別待遇でした。ナシム研修経験者だけでなく、日本滞在歴のある学生、これから日本での研修を望む学生、そして、学長、医療会議所東カザフスタン支部長も見送りに来ていただきました。

今回の旅は、出発時が散々でしたが、それ以外には大きなトラブルもなく、帰りは無事に日本に入国できました。病気やケガがなく皆そろって帰国できたのが何よりも良かったと思っています。

今回、2年ぶりにカザフスタンを訪れました。ほんの2年足らずの間に、アルマティには、まだ駅は4つだけですが、地下鉄ができ、長距離のロープウェイが設置され、新しい高級ホテルや高層マンションが立ち並び、道路はきれいに舗装され、レストランや空港のトイレにはきちんとトイレトペーパーとバックハンガーがあり、驚くばかりの目覚ましい発展を遂げていました。特に、セメイ市で見学したがんセンターには核医学センターが開設され、アルマティの市立病院では臓移植の計画が立てられ、医学の面でも日本を追い越す勢いを感じられました。このように急成長中のカザフスタンでは、やはりハード面についていくだけの人材の育成、教育、技術協力がこれまで以上に重要になるのではないかと感じました。今回はカザフスタン共和国医療会議所東カザフスタン支部と長崎県医師会との覚書も締結されました。今後のナシムは長崎大学だけではなく、医師会とも協力しながら、益々その役割と責任は重くなっていくと思われます。今回の旅でも、カザフスタンの皆さんと親密な交流をすることができ、そのつながりをより強固なものとすることができました。最新の機材や手技を導入し、他から学ぼうとするカザフスタンの人々の貪欲さを我々日本人も見習い、お互いに協力して両国の医療発展に貢献できるよう、これからも交流を続けていきたいと思っています。

韓国への専門家派遣事業を実施しました。



ナシム専門家派遣事業セミナーに参加して

長崎大学 原爆後障害医療研究所 血液内科学研究分野 教授 **宮崎 泰司**

9月6日から7日の一泊二日の行程で、韓国の大邱にある嶺南大学で開催されたナシム主催のヒバクシャ医療セミナーに講師として参加しました。一行はセミナーの講師である永山雄二先生と私のほか、ナシム事務局から担当の西さんと、通訳の朴さんの4名です。9月6日午前7時30分の九州号で福岡へ向い、福岡国際空港から飛行機で釜山（金海空港）へ入りました。金海空港から大邱市内まではタクシーでの移動で、大邱－釜山高速道路を1時間20分ほど走って、午後4時前にホテルへ到着しました。大邱はとても大きな街で、日曜日の午後でしたが市内は車の渋滞が続いていました。1日目は大邱市内の大邱百貨店周辺の繁華街の様子を4名で視察しました。



嶺南大学病院にて

二日目は我々のほか、セミナーを手伝っていただく韓国赤十字社の朴炳熙さんと尹世香さんとホテルで合流し、セミナーの会場である嶺南大学病院へ向かいました。

嶺南大学病院では、先ず院長室で、院長の鄭泰垠先生と、医療院長の崔秉淵先生を表敬しました。初めに永山先生が本日のセミナーの趣旨を説明し、開催協力へのお礼を申し上げました。医療院長の崔先生は2011年にナシム研修に参加され長崎を訪問されたことがあるとの事で、大変有意義な研修であったと、平和祈念像の前で写った写真を懐かしそうに見せてくださいました。

鄭病院長から、被爆者医療の状況やナシムの事業について質問がありました。長崎市内にはどれくらいの被爆者がいるのか、被爆二世への影響はどうか、その支援はどのようなものか、また、原子力についても日本としては原発をこれからも進めていくのかといった質問が出され、放射線やヒバクシャ医療について高い関心をもたれているようでした。

院長先生の説明によると、嶺南大学病院のベッド数は約千床とのことで、長崎大学病院より規模の大きな総合病院です。国家の呼吸器病センターに認定されているとのことで、センターが入る新築したばかりの国際医療棟には、診断・治療用の医療機器も最新のものが入っていました。そこでは、放射線科腫瘍学科のイエ・ジウォン先生から放射線科の施設を、4人の若い先生方から国際医療センターを案内していただきました。

国際医療センターは、外国人の患者を受け入れる目的で設置されており、中国人や米国人の患者も多く、また原爆被害者福祉会館のある^{はぶらよん}陝川からも患者が見えているとのことでした。嶺南大学病院で診療を受けている被爆者の方は、以前は100人程いたが、現在は約80人が通院しているとの説明を受けました。



熱心に聴講される参加者の皆さん



講演を行う宮崎教授

講演を行う永山教授

ヒバクシャ医療セミナーは正午からの昼食時間に行われました。食事をしながらのランチョンセミナーです。受講者席は30席用意されましたが、ほぼ満席でした。

まず、私が「放射線の造血器に与える影響」と題して原爆被爆者にみられる放射線の長期影響について講演し、次に永山先生が「放射線災害：長崎、チェルノブイリ、福島と比較」と題して、福島原発事故への対応やその影響に関する現在のデータなどについて講演なさいました。講演後の質疑応答では、私に対しては「原爆の被爆2世への影響はどうなっているのか」との質問があり、「これまでに複数の研究がなされており、研究の方法が違うので結果は少しずつ異なるが、今までのところ統計学的に有意な医学的影響は見つかっていない」と回答しました。また、永山先生に対しては「福島で発見されている若年者の甲状腺がんは原発事故からの潜伏期間が3年しかないが、チェルノブイリでの影響と比較して結論が出せるのか」との質問があり、「これまでに福島の若年甲状腺がんに関して収集されたデータは、今後の調査の基本となるものである。それを元に今後も甲状腺がんのスクリーニングを続け、研究、比較していくように計画している。チェルノブイリで小児に甲状腺がんが出始めたのが事故後4～5年だったので、福島でもこれからしっかりと見ていく必要がある。」と回答されました。ほとんどの参加者は医師で、熱心に聴講され、放射線の人体影響について関心の高さを感じました。

今回の発表が、嶺南大学病院でのヒバクシャ医療に少しでも役立つことを祈念しています。



セミナー終了後参加された先生方と